

書評

ケニス・ポールディング著

『映像——生活および社會における知識』

Kenneth E. Boulding: *The Image, Knowledge in Life and Society*,
The University of Michigan Press, 1956.
175 p.

山田雄三

ここで「映像」というのは、人間の生活の維持や發展に關連して理解される。人間は生まれ出ると、最初は未分化のままの光や音を受け入れ、やがて物と人との區別を知り、さらに物の世界のなかにおかれて自己を見ようとする。そこに「映像」というものが形成される。それも初めは自分の家なり近所なりの狭い世界にとどまるのであるが、次第に都市とか國とか地球とかのなかの自分を意識し、人々の複雑な關係を考へるようになる。かくていろいろなメッセージを通じてわれわれのイメージは變化し、イメージの變化によってわれわれの行動の仕方が變化していく。「映像」というのは普通の言葉では「知識」といってもよいのであるが、いまこの場合は客觀的知識よりも

もっと根源的なものが考へられ、そのためにこの言葉が選ばれているものと思われる。

社會の組織化は各人のいづく各種の映像の「交わり」から理解されるのであり、これが本書の主題をなすのであるが著者のいう組織化ということは廣く一切の事物のユニヴァーサルな原理として考へられている。人間の活動が映像によって規定されるのも組織化の原理によるのであるが、さらにおよそ生命あるものは自然に放置すれば腐敗してしまうのであって、腐敗を防ぐには組織化がなければならないと考へられる。また單に有機體のみにとどまらず、力學的世界においても、エントロピーの問題とか、最近のサイバネティクスとかいう問題は組織化の理論につながる。本書では主として人間や社會の組織化が問題であるが、ここではイメージの獲得および交渉を通じて組織化が進んでいくと解され、その意味で知識の組織化における作用が究明されるのであって、著者はこれに *eidonics* || *study of forms* という特殊の命名を與えている。問題の展開を目次によって示すと、第一章「序説」に續き、第二章「組織理論における映像」、第三章「生物における映像」、第五章「人および社會における映像」、第五章「公共的映像と知識社會學」、第六章「經濟生活における映像」、第七章「政治過程における映像」、第八章「歴史における映像」、第九章「公共的映像の諸群」、第十章「エイコニクス」、第十一章「映像と眞理」等と論を進められている。

これら諸章は適切な例と幾分皮肉的な筆致をもって讀者を魅

惑していく。著者は知識を映像とか偶像とかいう意味で理解する。それはかつてマンハイムが知識を社會現象として理解したのと一脈相通する問題であろう。ただマンハイムの知識社會學は知識の社會的形成過程をとりあげているのに對し、著者のエコニクスなるものは社會の知識的形成過程をとりあげて見られるが、いずれも知識を單に客觀的なものとしてではなく、社會や歴史のなかに特殊の役割を演ずるものとして考えるところが共通している。いわゆる科學的知識というものは論理や實證を基準として討議されていくものであり、われわれはそれを客觀的知識と考えるものであるが、根源においてはそういう知識も社會的・歴史的な特殊の性格をもつのであろう。經濟學においてヴィジョンとかイデオロギーとかいうことが常に問題になるのもそのためであらう。著者はそういう知識の根柢を考えて社會組織化に演ずる知識の役割を究明しようとしているのである。

しかし客觀的と考えられる科學的知識とその他の非科學的知識との間の差はどのように考えるべきであらうか。論理や實證を基準とする科學的知識も結局はイメージとかエコニクスとかを形成するには違くないが、非科學的知識によるそれらとは區別があるはずである。もし科學的知識が常識的知識を壓倒していくものとすれば、その理由は論理や實證を尊重する態度が次第に勢力を得ていくためと考えてよい。ただ實際にはそう簡單なものではないであらう。社會現象においては科學的知識と非科學的知識とは絶えず葛藤をつづけ、獨斷とか感情とかい

う要素が常にはいりこんでくる。著者はそのために知識の客觀性ということよりは知識の社會性ということに注目していくのであろう。知識はあくまで社會現象のなかに含まれる對象としてとりあげられるのである。ただそういう過程のなかにもとくに科學的知識が科學として特殊の役割をもつことについて、本書を通讀してなお疑問を残さざるを得ない。さらに知識を對象とする知識、すなわち著者のいうエコニクスそのものはいやはいや科學として論理と實證を基準とする客觀性を狙っているはずであり、そういう形式的説明を乗り越えようとしている意圖は一應わかるが、この點についても著者の説明はまだ十分納得的ではない。たしかに本書は、およそ社會科學の根柢における價值判斷の根據や理論的假設の意味について多少とも反省しようとする人々に對し、數々の示唆を與えるであらう。主觀と客觀、價值と事實、これらの解きほどし難いからみ合いは、映像という概念のうちに巧みに融けこまされている。問題はまさにその點にある。著者をも含めて現代人にとっては、イメージの形成にあたり、科學的・分析的なメッセージが極めて支配的なルーチンになっており、そのために絶えず主觀と客觀、價值と事實との分裂にさいなまれているのではないか。著者は單なる分析的なものを超えるために *tools* をもち出すのであるが、同時に科學そのものは *iconoclasm* を生命としているのではないか。この相反する二面性から、著者が考えているよりもっと不安定な組織化の理論が生まれるのではないかと私には思われる。

(一橋大學教授)